観光とフィールドワークのパフォーマンス
――Covid-19 における移動危機から見えてくる観光研究とフィールドワークの同型性についての試論――

The Performance of Tourism and Fieldwork
: Testimony on the isomorphism between tourism research and fieldwork as revealed by the mobility crisis of Covid-19

須藤　　廣*

要　旨

Covid-19 による移動の制限は、観光経験のあり方を変えたばかりでなく、フィールドワークのあり方も変えた。両者の変容には同型性があり、相互に入れ子状になっている。現代の観光は観光客の参与を促しつつ、視覚のみではなく五感を使った経験の過程、すなわちパフォーマンスを重視するものになっている。フィールドワークもまた、対象を客観的、傍観者的に観察するのではなく、また対象の行為者が共有する主観を研究者の解釈枠組みに無理矢理押し込むのではなく、対象の行為者の主観に分け入って、それを共有しつつ解釈を試みる実践を重視するものと理解されている。両者は、記号から現象へと向かう動的な過程を中心とした、文化創造的なパフォーマンスの実践として捉えることができる。

そしてさらに、その観点から Covid-19 後の観光とフィールドワークの可能性と限界を考えると、一方では観光とフィールドワーク両者における異文化世界の経験の豊穣さが減じられる道程が、他方では近接して類似した同種文

＊法政大学教授

化を「異化」し、新たな視点を発見する実践への道程が見えてくる。また、両者とも文化創造に参与する実践者であると捉えれば、その自覚と責任のありようも当然、実践の射程に入れなければならない。

Abstract

The restriction of movement by Covid-19 has not only changed the nature of the tourist experience, but also the nature of fieldwork. Both transformations are isomorphic and nested in each other. Contemporary tourism has become more performance-based, encouraging the participation of the visitor and the use of all five senses in the process of experience, not just the visual. Fieldwork is also understood as a practice that does not observe the subject objectively or from the sidelines, nor does it force the subjectivity shared by the actors of the subject into the interpretive framework of the researcher, but rather, it enters into the subjectivity of the actors of the subject and tries to interpret it by sharing it. Both can be seen as culturally creative performance practices that focus on the dynamic process of liberating them from sign to phenomenon.

Moreover, if we consider the possibilities and limitations of post-Covid-19 tourism and fieldwork from this perspective, we can see, on the one hand, a process of diminishing the richness of the experience of the intercultural world in both tourism and fieldwork, and, on the other hand, a process of 'alienation (Verfremdungseffekt)' and discovering new perspectives on close and similar homogeneous cultures. In addition, if we consider that both of tourists and fieldworkers are practitioners who participate in the creation of culture, their awareness and responsibility must be included in the scope of reflection and practice.

キーワード：Covid-19、観光経験、フィールドワーク、同型性、パフォーマンス、記号、現象
Keywords：Covid-19, tourism experience, fieldwork, isomorphism, performance, sign, phenomenon

1. はじめに

Covid-19 による社会的危機により、（本稿執筆現在）世界中で 1 年半のおよぶ移動の規制が続いている。移動の規制により最も影響を受けたのは観光である。感染の被害者および加害者になるリスクは、観光者が観光地へと「不要不急」の足を運ぶ気運を大きく損ねる。観光者の気運の低迷は、観光業の売り上げの減少だけでなく、観光が作りあげてきた人々の交流の停滞状況を招いていることは、社会的に懸念を持たれている。しかし同時に、こういった観光の停止状況から観光を反省的に捉える視点を検討するといった試みも数々行われていることも注目すべきである（立教大学観光学部 2021, 立命館大学人文科学研究所 2021）。

以上のような観光の視点の再検討の作業をするなかで、観光的移動の研究には観光研究者の移動も必然であったことに気づく。観光地で観光者がどのように行為しているのか、現代の観光サービスがどのように行われているのか、観光地の住民はそれらをどのように受け止めているのか、といったことに関するアクチュアルな現実は、観光研究者が足を運んで調査をしないと分からない。そしてそれを、観光研究者（人類学、社会学、地理学等の訓練を受けた観光研究者は特に）はフィールドワークとして実践してきた。観光研究者の多くは特定の観光地をフィールド（現場）として持っており、その地で身体的に知り得た感覚や情報をもとに観光の理論を作ってきた。

いうまでもなく、Covid-19 による観光者の移動の停滞は、観光研究者の移動の停滞に直結してしまう。現実に進行しているこのような事態には、観光

者の（実践の）研究における視点の再検討同様、観光研究者（特にフィールドワーカー）の実践に関する視点の再検討を要する機会を得たと捉えるべきであろう。

これまで筆者は、観光者による観光地解釈の原点をE・ゴフマンの「表領域 / 裏領域」論（Goffman, 1959/1974 石黒訳）、を応用したD・マキャーネルの「演出された真正性」論に見てきた（MacCannell1999, 安村克己他訳 2012,110-131）。あるいはそれを観光システムにおける行為とその環境の関係性という意味で、N・ル―マンの自己組織的システム論に見てきた（Luman, 2012/2016 土方・大澤訳；須藤・遠藤 2018）。本稿では、観光研究と観光研究・研究を連結する目的を持って、観光で経験する世界を類型化、あるいはカテゴリー化（以下これを「記号化」と呼ぼう）し、膨大な情報を縮減しようとする傾向と、それを異化し記号の外側に向けて経験のありようを「現象」に広げようとする傾向、あるいは別様に記号化する傾向との関係について考察しようと思う。

筆者はマキャーネルの「表舞台」/「舞台裏」論における「舞台裏」を、もう一つの「表舞台」と捉えるところから解き放ち、記号化された（マキャーネルにいわせれば「マーク（表徴）」された）対象から、現象へと広がった「類型外」[1] の地点へと広げて考えてみたい。すなわち、観光者は観光地の世界の情報を縮減しつつ記号化する力とそれを現象の方へと開こうとする――あるいは開こうとする力が記号へと回収される――力の拮抗関係のなかから観光における創造性（または快楽）を得ている。また同時に、観光のフィールドワーカーも（いやフィールドワーカー一般も）、フィールドに深く入り込みつつ、フィールド（現場）を類型化しカテゴリー化する（記号化する）力とそれを解体する――あるいは別様に理論化するーー力との拮抗関係のなかにおいて学術的実践をしている。すなわち、観光の実践と観光研究の実践は、概ね入れ子状の同様の構造を構成している。

このことから、Covid-19 による観光の危機は、観光研究の危機でもあると

考える。観光は現在、大きく移動をともなうものから移動を極力おさえるものへとシフトしてきている。一つは観光のバーチャル化の動きであり、もう一つは行動半径を限定するローカル（狭域）化の動きである。このことによって観光が新しい形式を獲得できるのか、あるいは衰退を余儀なくされるのか未知数である。同様に観光研究もまた、バーチャル化とローカル化の傾向を推進するであろうと考える。観光、観光研究とも新しい形式を獲得できるのか、衰退を免れる道はあるのか状況は同様である。筆者は、Covid-19 危機が、観光の新しいあり方に向けた指針を与えると同時にその限界も示していると考える。観光研究もまた、同様である。本稿では、特に観光研究におけるフィールドワークとは何かについて再検討するなかで、移動が制限されたなかにおける、観光研究の新しい方向性とその限界について考えてみたい。

2. 観光経験における過程への注目

J. アーリは『観光のまなざし』初版を（Urry, 1990/ 1995 加太訳）、第 2 版では表現をする観光地に重点を置きつつ修正を加え（Urry, 2002）、第 3 版（増補改訂版）では、観光客の参与のあり方に焦点を当てる J. ラースンを書き手に加え、観光客をも含めた観光の表現の過程に注目をおくよう構成を改めた（Urry & Larsen, 2011/2014 加太訳）。タイトルから分かるように、アーリの「観光のまなざし論」は、M. フ―コーの視覚による認識の体系化、主体形成についての構造主義的理論に基づいており、決定論的であるという批判を受けることになる（MacCannell, 2013）。第 3 版までの修正の過程でアーリは、観光表象による認識の決定論から脱すべく、観光表象を作り変える地域や市民社会のあり方にも注目し、また視覚だけではなく、五感による観光表象にも着目してきた。特に、第 3 版（増補修正版）では、観光客の観光表象体験への参与のありようを大きく取り上げている。ここでは、観光体験とは、

作り込まれた観光表象をそのまま体験することではなく、自らの創意と関与によって演じる（パフォーマンスする）体験であることが強調される。それを捉える「パフォーマンス転回」の理論はまた、「パフォーマンスは決して完全には事前には決められない」といった非決定論なのであることも重要である（Urry & Larsen, 2011/2014 加太訳, p.295）。ラースンの視点を大きく取り上げアーリは、観光経験が、観光消費の単なる結果ではなく、観光客が観光に関わる過程で創造的に生み出されることに焦点を当てている。また、この時、観光客の観光経験は視覚だけの経験ではあり得ない。五感を使った体験こそが観光の経験であることが示されている。観光経験の「過程」への注目は、観光客が観光表象の創造に参与している、その現場のありようを示すことであったといえよう。

このことを受けて日本の観光研究者も、観光制作者が観光客に差し示す観光表現の意図やその結果（効果）ではなく、その過程に着目する論文が多く出された。アートツーリズムやロックフェスティバルにおける芸術鑑賞への五感を使った参与経験、スポーツツーリズムにおける、身体的参与がつくりだす観光経験等、観光客の参与による観光経験の創造過程へ注目した論文が目立つ（橋本, 2016; 須藤 2017）。また、現代芸術においては、「社会参与アート」の興隆に特徴的にわかるように、作品は鑑賞者の参与と分かちがたく結びついており、その芸術性も鑑賞者の参与がどのようなリアリティ変容あるいは「異化効果」をもたらすのかに着目するものもの数多く紹介され（Helguera, 2011; Bourriaud, 2012; 藤 & AAF ネットワーク, 2012 ; 北川, 2015）、このことがアートツーリズムの研究とも重なっていった（須藤, 2017）。

このような観光客の観光表象づくりへの参与は、名所、旧跡、名勝という固定的な観光対象を超えて、観光対象を増産し続ける現代観光のあり方と密接に関係していることはいうまでもない。観光経験のあり方が固定的に決まっていた時代においては、観光客は名所、旧跡、名勝の固定化された解釈

体系を学び取れば、立派な観光客になることができた。産業化された観光の近代的ありようは、このような固定的な観光地解釈から観光客を解き放っていった。人工的に作られていった名所、旧跡、名勝の解釈は、さらに観光客も参加しながら作りあげられるようになる。日本においては 1970 年以降のディズカバー・ジャパンキャンペーンによって創造された観光地が、観光客のパフォーマンスをかりたてたことは、近代観光の行く末を示していた（森, 2007）。

日本の観光のあり方において決定的であったのは、（現地の）名所、旧跡、名勝とは何も関連性を持たない東京ディズニーランドの開園である。伝統的な観光経験のなぞり方と異なり、ディズニーランド（特に東京のそれ）は観光客に観光経験のリテラシーをある程度は教えるものの、あくまでも個々の観光客の参与を前提としており、参与と五感によるモデルなき――身につけるもの等のパターンはあるが――体験が観光経験を作りあげていくものであった。観光客は参与を中心としたリテラシーを暗黙のうちに学習する。観光体験の質は、観光客自身の参与の深さ次第となる。

参与を促す観光経験は、記号をとおして観光客の経験を強く枠付ける必要性を持つと同時に、観光客の参与が与えられた枠を超えることがあることにも注目しなければならない。伝統という枠組みによらない人工的なフレームは、伝統の権威によらない分、観光客の自由な行動に開かれていった。東京ディズニーランドらのリピーターの多くが、ディズニーランド運営側の意図を超えた行動をしている様子は、多くは「D オタ」（ディズニーランド・オタク）の独特の行動として報じられている。観光客の参与を促す観光は、その自由な枠づけのあり方から、定型を逸脱した観光客主導になりがちである（新井, 2016）。

観光客の参与が観光のあり方を大きく左右する観光は、まんが・アニメツーリスムに代表されるようなコンテンツ･ツーリズムである。コンテンツ･ツーリズムにおいては、観光客の多くは、当該のコンテンツのファンであり、

埼玉県の久喜市鷲宮地区におけるまんが・アニメ「らき☆すた」のファン、茨城県大洗町における「ガールズ&パンツァー」等の例から、そのパターンが分かる。現地の観光表象の解釈は初期のファンが探し出したものであり、それをまた追従するファンが参与しつつ消費している(岡本, 2013)。ファンの観光地づくりへの参与に失敗したコンテンツ観光地づくりの多くは、ファンの参与体制(パターン)づくりの失敗であることからもこのことが分かる。

以上のように、現代の観光が伝統によるイメージ規定性を観光客の参与によって打ち破っていることを描いてきたが、観光地の記号的イメージの固定性と観光客のパフォーマンスによるその乗り越えは、現代の観光における特徴であると同時に、観光そのものが通時的に持つ特徴でもあることも指摘しておこう。名所、旧跡、名勝に対する社会的な「まなざし」の規定性は前近代の観光においては、その権威を背景に強力であったことはいうまでもない。前近代の観光は伝統の権威が作りあげた固定的な「記号」への収斂を特徴とするものだが、観光の情報やインフラが整っていない時代には、そこから逸脱せざるをえない観光形態も多く存在したはずである。杜甫や李白の詩的イメージを松島に当てはめようと旅に出た松尾芭蕉が、目当ての松島を見たとき、自らの経験を記号的イメージ(俳句の言語)に当てはめることができずに沈黙した話はよく知られている(松尾, 1702/2003 潁原・尾形訳)。また「道中もの」の書物にもあるように旅の偶然性が記号を超える瞬間が観光の冥利として語られている。「記号」へと収斂する伝統の観光表象も偶然を含む「現象」へと開かれており、「記号」と「現象」との緊張関係こそが観光の快楽を作りあげていたことがわかる。

現代の観光は、表象における伝統のくびきからは開放されており――新しい伝統は常に創られてはいるものの――、その記号性が人工的に構築されている分、「現象」へと開く力が働き、参与による観光客の役割の比重が高まっている。このことが、観光研究をして観光客のパフォーマンスへと注目させているといえよう。

鑑賞者の参与とパフォーマンスが観劇の快楽を作りあげている文化の典型とも言える現代の舞台アートシーンについて、須川はE. フィッシャー＝リヒテの舞台芸術論を使って説明している（Fisher-Lichte 2010; 須川 2021）。特に2.5次元舞台においては、オリジナルがまんが、アニメやゲームであるゆえに、表象が記号へと収斂する力が強い。しかしながら、鑑賞者の参与とそれに呼応した役者との交流の振る舞いによって、記号性は偶然性を孕む身体的現象へと大きく開かれている。須川はまた、舞台における2．5次元的空間が舞台から外に飛び出し観光空間へとつながっていると指摘する（山村＆シートン 2021:195-216）。このことは2つのことを意味しているのである。1つ目は「現象」へと広がる観光客が参与するパフォーマンス的創造空間の成立である。このことは山村がクリエイティヴツーリズムへの道として示しているものの一つである（山村, 2017）。2つ目は2．5次元の観光空間が観光客の参与を誘導するスキームを持っていることである。現在2.5次元的舞台空間の観光地への広がりのなかで特徴的なのが、オンラインゲームから舞台化され、ストレートプレイからミュージカルへとつながった『刀剣乱舞』である。オンラインゲーム『刀剣乱舞』では、プレイヤーが刀剣男士を操る「審神者（さにわ）」となり、育成するという設定になっており、ファンの参与は誘導されていると見なすことができる。

観光客の参与とパフォーマンスについては、冒頭で取り上げたように、D. マキャーネルが「演出された真正性」として、観光の「表舞台」（記号）と「舞台裏」（現象）の関係の中で議論されている（MacCannell,1999/2011 安村他訳, pp.240-333）。マキャーネルの議論なかで重要なのは、「表舞台」の記号からはみ出る「舞台裏」の現象が、先取りされて観光体験の構造のなかに組み入れられているということである。コペンハーゲンのレストラン、ラ・キュイジーヌのキッチンは既に「記号」化されており（MacCannell, 1999/2011 安村他訳, p120）、前述したパフォーマンス空間の2つ目（演出型）の例に近い。「刀剣乱舞」の例は、非意図的である部分が多く、鑑賞者の積極的な参与は

半ば非意図的だったとも考えられ前者（非演出型）と後者（演出型）との中間型であるといえる。とはいえ、両者の構造は同様である。

現代の観光現象における消費者の参与は商業的な誘導の結果であるかどうか（あるいは今後そうなるかどうか）はマーケッターに任せるとして、本稿では観光が「記号」の優位から次第に「現象」の優位、すなわち観光客のパフォーマンスへと開かれているという点をここでは強調したい。

3. ポスト・コロナ時代の観光における記号と現象

Covid-19 のパンデミックが観光的移動にもたらした影響についてはここでは多くを語らない。次の 2 点においてのみ本稿の論点として加えたい。1 点目はリアルな移動がバーチャルな移動へと置き換えられた点、2 つめは観光的移動が空間的に狭められた点である。次に議論するのは、この 2 点がこれまで述べてきた観光の「記号」への収斂と「現象」への解放との緊張関係にどのような影響をもたらすのかということである。

観光地の現実は膨大な情報に満ち溢れており、観光地（行政および観光業者）は膨大な情報のなかから、観光客が理解（消費）しようとする、あるいは観光客に理解（消費）させようとする情報を類型化しカテゴリー化し（つまり記号化し）観光客に提供する。この時に、観光提供者は、観光客が「記号」的現実へとすべて誘導され尽くすとは想定していないであろう。すなわち、観光提供者は、「記号」を頼りにそれを確認しようと訪れた客が、それから外れた「現象」をも消費する、そしてそれが恐らく観光客の興味を惹く可能性も予想するに違いない。観光地も一つの舞台であり、そこは「記号的環境」と「現象的環境」の両方を持ち、観光客は「表」から「裏」へと入り込む存在だからである。パンデミックを受けバーチャル化した観光実践もまた、バーチャルという「記号」的世界の中でできる限り、「現象」に近づこうとするはずである。例えば、オンラインで行われるスキューバダイビング

観光では、画面越しのダイバーにもっと深く潜るように、あるいは岩の下にどのような生き物（決して鮮やかな熱帯魚ではなくとも）がいるのか覗くように希望を伝えることができるかも知れない。しかしながら、その努力は、リアルなダイビング観光の情報量とその文脈の理解という点においては遙かにおよばないことが分かるであろう。バーチャル・ダイビングツアーでは、「記号」と「現象」との緊張関係ということも、かなりな程度減じられるだろう。

観光空間の広がりが減じられる点はどうだろう。観光空間の広がりは、居住地と異質な観光地への観光経験を広げる。例えば海外旅行がわかりやすい例だろう。2000 年以降続いたモビリティ拡大の時代は、グローバルな文化の画一性も招いたが、それ以上に観光客が異質な文化に触れる機会を増やした。Covid-19 のパンデミックが招いた海外渡航の急激な減少は、政府の GOTO キャンペーン政策によって国内観光地への関心を惹いたこともあったが、全体的には国内観光地の人気沸騰はほとんど聞かれなかった。唯一聞かれたのは、「マイクロツーリズム」の推進というローカル圏内の観光移動の推進であった。地域圏内ローカル観光の特徴は、地域内の同質の場所に「異質性」を見いだすところにある。つまり、異質な文化に同一化する経験ではなく、同質な文化内に「異質性」を発見することである。前者の経験は観光経験として成立しやすいが、後者の経験は「異質化する」という努力や操作が必要であり、それなりに知的な態度が求められよう。とはいえ、まち歩き観光や、下町観光等、パンデミック以前から盛んに行われていたものも多く、この経験が生かされるだろう。この点は、観光的移動が制限されたことから生じた意図せざる収穫であったといえる。

4. 観光客の観光経験とフィールドワーカーの経験

以上述べたことが、観光客の経験と同質なものとして、フィールドワー

カーの経験も説明できるだろうか。筆者は観光地にとっての観光客の位置づけとフィールドワーカー（特に観光研究のフィールドワーカー）の位置づけは類似点が多いと考える。前述したように、観光客はカテゴリー化された表象を確認しようとする。そして、多くはカテゴリーの外側にある「現象」へと向かう。多くの観光客は多少なりとも観光体験に類型化された「表領域」から類型化がなされていない「裏領域」へと向かう「カルチャーショック」の味付けを求める。フィールドワーカーはどうか。フィールドワークの目的は、研究者によってあらかじめ類型化された対象地域の世界を再確認することもあるが、多くのフィールドワーカーの経験は、類型化された対象の表象の外側へと向かう。フィールドワークの目的は類型化された現地へのまなざしを、研究者の実践によって乗り越えることにある。P.L. バーガーが社会学の本質をなすものの見方として取り上げているように、「世界は目に見えるとおりのものではない」(Berger & Kellner, 1981/ 1987 森下訳, p6）のである。フィールドワークは、今まで研究者が身につけ馴染んできた文化が、研究対象の文化によって根こそぎ否定される「カルチャーショック」の体験を伴うものである（佐藤, 1992)。

さらに立ち向かう異文化を理解するためには、フィールドワーカーには文化の再教育「文化的な子供時代の再現」(佐藤, 1992, p37）が求められる。しかしながら、フィールドワーカーはそのまま現地の文化に染まることはまずないだろう。フィールドワーカーはあくまで現地にとっては「異人 stranger」なのであり、現地の文化の意味をそのまま馴染みの日常として受け入れることはない[2)]。フィールドワーカーの視点は自らが持つ常識の視点でもなく、対象の常識の視点でもなく、第三者の視点を持つものである。したがって、観光研究のフィールドワーカーは観光地解釈におけるカテゴリー化した表象から観光客よりも先に抜け出し、現象に分け入るだろう。しかしながら、観光客もまた観光地解釈のために類型化された記号から、類型の外側の現象へと向かう態度には類似性があるといえる。観光者もまた、第 3 者の視点を

持ちうるのである。

とはいえ、フィールドワーカーは学問的に訓練されコントロールされたものの見方を持つとはいえる。フィールドワーカーは観光の表象のために類型化された記号を現象に解体するだけではなく、現象の中で解体された記号を、もう一度学問体系のカテゴリーへと組み替える（翻訳する）。すなわち、観光のフィールドワーカーは行為者（ここでは観光地住民や観光客）の「有意性の構造」を理解しつつそれに従いつつ、それを学問の「有意性の構造」のへと解釈し直すことをしているはずである。あくまでも行為者の意味世界にもとづきつつではあるが、それを観察者の意味世界へと移し換える、A. シュッツのいう二重の解釈（「適合性の公準」が基礎にある）がこれに相当し、また、M. ウェーバーの「理念型」もまた、行為者の意味解釈を基準とした、この二重の翻訳の結果作られるモデルである。すなわち、フィールドワーカーには観光地住民や観光客の現地理解に加えて、もう一つの操作を加えている。

しかしながら、先述したようにフィールドワーカーのこういった還元主義的態度には批判がある。特に、シュッツ以降の対象世界の意味理解の方法を突き詰めた解釈学的社会学は、対象世界の意味解釈が結局のところ、社会学といった科学が構築した架空の意味世界へと押し込められ歪曲されているという、批判を推し進めてきた。この先陣にいたのはのはA. シクレルやH. ガーフィンケルといった「エスノメソドロジスト」たちであった。シクレルは主著『社会学の方法と測定』のなかで、社会学は研究対象の人々独自の文化的文脈を持つ言語の意味を、研究者の社会的言語のなかに、無理矢理押し込めているといった警告を行っている（Cicourel, 1864/1981 下田監訳）。「エスノメソドロジー」の要諦は、フィールドワーカーが観察対象の人々による意味の発生現場に立ち会うことにある。すなわち、フィールドワーカーが経験する、現地の行為者から受けた「カルチャーショック」をそのまま記述し、伝えることである。

「エスノメゾソロジー」の功績について詳細な議論はここではしないが、筆者はエスノメソドロジストが学問的解釈の押しつけを回避することに成功しているとは思えない。世界の意味が立ち現れる現場の記述もなんらかの「二重の解釈」(「理念型」の生成)の産物である。フィールドワークとは何かといった問題に立ち返ってみると、ウェーバー主義に代表されるような解釈学的社会学が捉まえようとしていたのは、対象世界の意味解釈における人々の行為の「文脈」である。そして、ここで重要なことは、この「文脈」の理解が、研究者が「傍観者」として手に入れるものではなく、行為者の意味の追体験によってなされるものだということである。異文化における行為者の意味の追体験を「カルチャーショック」として学問体系への翻訳を一切行わず、記述したといわれているエスノグラフィーにC.カスタネダの『呪術師と私――ドンファンの教え』があるが、これとて「カルチャーショック」をカスタネダ独自の「世界」への翻訳として伝えている(Castaneda, 1968/1974, 眞崎訳)。要するに、フィールドワークの目指すところは行為者の意味への還元ではなく、行為者の意味によって受けた「カルチャーショック」の経験であり、そのことの解釈と伝達にある。そういった意味においては、フィールドワーカーも「異人(stranger)」の役割を持っており、この役割は根本においては、熟練した「観光客」と変わりはない。

ただ、観光客も「カルチャーショック」経験について「二重の解釈」をしているが、フィールドワーカーが最終的に解釈の拠り所とする学問体系とは「有意性の構造」の体系性と深さが異なる。また、観光客とフィールドワーカーは自分の生活世界とは文化を異にする観光地に「非日常性」を発見し、そこにおける「カルチャーショック」を体験するといった点では類似しているが、観光研究のフィールドワーカー(特に人類学的手法を採用する研究者)は観光客よりも深く観光地に「同化」(土着化)しようと試みるだろう。しかしながら、再度強調すれば、観光客(特にリピーター化して観光地に馴染んでいるそれ)と観光研究のフィールドワーカーの体験は深さと体系化と

いった質的差異（フィールドノートの取り方といった少々の技法の有無等）を無視すれば、基本的な構造は似通っている。フィールドワークをとおして観光研究者が知ろうとする最も重要なことがらは現地の観光地のあるいは観光地住民表現の裏側に流れている「文脈」であるが、観光客とて（特にリピーターともなれば）これを知ろうとすることが多く、両者の構造は同型である。すなわち、両者の共通点は「カルチャーショック」をとおして、新たなる視点を発見することにあり、その創造性の原点はその結果ではなく、新たな「意味」が生み出される「過程」におけるパフォーマンスにある。

5. ポスト Covid-19 時代のフィールドワークにおける記号と現象

ここで、観光とフィールドワークの本源的類似点を意識しつつ、観光経験がCovid-19危機後どのように変化するのかについて考えてみたい。すでに述べたことだが、観光研究のフィールドワークも観光同様の制限を被っている。そして、Covid-19の蔓延による観光の制限が、観光研究の制限につながっている。

Covid-19パンデミックによる観光的移動の制限が観光にどのようなことを生じさせたかについて、既に2節で述べたことの要点を繰り返せば、一つは観光のバーチャル化であり、そのことは、観光における経験の厚み、すなわち「記号」と「現象」との緊張関係を減ずることにつながるだろうと結論した。もう一つは観光の狭域（ローカル）化である。このことが意味することは、これまで生活世界の日常にあった世界を「異文化」として再発見する観光の深化である。これらのことは観光のフィールドワークについてはどうように説明できるだろうか。

フィールドワークでは多元的な視点から、行為の複雑な文脈を探る記述が求められる。対象の行為の文脈を2次的3次的にフィールドワーカーが対象との相互行為の中で再構成することを人類学者クリフォード・ギアーツは

「厚い記述（thick description）」と呼んでいるが（Geertz, 1973/1987 吉田訳）、このことからフィールドワークとは、対象から得た意味世界を表現する創作行為の過程とみることができる（Geertz, 1973/1987 吉田訳, p.26）。

前章で筆者が述べた「意味」が見いだされる「過程」としてフィールドワークとはまさにこのことの謂いなのであるが、移動の制限はこういった「厚い記述」にとって大きな障害となるだろう。電話やビデオ通話（例えばZOOM）等をとおして得られる情報は、たとえそれが双方向のものであって対面のものとは異なる。研究者の「意味」の相互行為をとおした「厚い記述」には、対象が何を語っただけではなく、どのように語ったのか、どのような環境で語ったのか、あるいは何を「語らなかったのか」等複雑な情報が含まれる。こういった全ての「文脈」を電話やビデオ通話ですくい上げることには限界がある。「文脈」の複雑性を欠いた記述は「薄い」ものにならざるを得ない。工夫次第では、文脈を深く理解できる「厚い記述」に近づけることは、可能かも知れないが、非言語的なものも含めた相互行為をとおして理解される「厚い記述」までたどり着くことは難しいと筆者は考える[3)]。

二つ目のフィールドワークのローカル（狭域）化が生み出す可能性についてはどうか。これについてはマイクロツーリズムの可能性同様、新たな可能性を持つと考えられる。地理的に遠くに赴く――あるいは近接していても「異質」な文化を持つ――フィールドワークでは、対象の行為についての文脈理解には、研究者側から対象への「土着化」の努力が試される。「異質」な集団に対して研究者自らが「土着化」することには、ストレスや困難が伴う。とはいえ、対象の文化が「異質」なほど、そこへの気持ちの切り替えチャネリングは明確であり、研究的にはむしろ平易だともいえる。むしろ、地理的に近接していて、しかも同じような生活世界に生きている人間集団を理解しようとする方が、観察の方法としては難しい。常識が同一であるために、慣れ過ぎた文化のなかに、新たな発見をすることは却って難しい。常識が邪魔をするからである。「異質」な文化理解は人類学的であり、「同質」な文化理

解は社会学的ともいえよう（佐藤、1992）。狭域の「マイクロ」フィールドワークにはより社会学的な操作が必要になるかもしれない。近接かつ同質の集団へのフィールドワークは、研究者がまず自らの「常識」を疑うことが必須であり、その困難は伴うものの、日常生活を「異化」する新たな「発見」の可能性を秘めている[4)]。

以上のように、観光的移動の制限が観光にもたらすものと、フィールドワーク（特に観光研究のフィールドワーク）にもたらすものには同型性がある。

6. おわりに

フィールド（現場）は決定論を嫌うものである。観光客が場所解釈のステレオタイプへと誘う「記号」の外側と向かおうとするのと同じように、フィールドワーカーがフィールドに向かう前に仕入れたフィールドの知識は、フィールドの複雑な現実と出会ったときに打ち砕かれる。フィールドワーカーが最終的に向かうべき何らかの理論化は、フィールドに赴けば赴くほど否定されることが多い。

例えば、筆者のベトナムにおけるフィールドワーク経験からいえば、観光はベトナム北部山岳地帯の観光地の呼びものとなっている少数民族に経済的、社会的、文化的は利益をもたらし、そのことが彼らをエンパワーンメントにつながっているかといった問いに、単純な答えを見いだすことはできない。経済的利益一つとっても、同じ少数民族のなかでも観光への参入が上手く行った家族とそうは行かなかった家族はどのような違いがあるか、社会的にはそれがジェンダーの関係をどのように変えていったか、観光によって伝統文化がどのように変容し、そのことが彼らの幸福感にどのような影響をもたらしたのか、この地に赴けば赴くほど複雑な事情にぶち当たる。

遠くベトナムの山岳観光地ではなく、比較的親しんだ日本の温泉観光地の

フィールドワークを行っても同様のことが起こる。住民のインタビューを繰り返しても住民によって（あるいは聞き方によって）反応は異なり、一つの物語に収斂することはできない。よくあるような、町の観光協会や役場の観光課に1、2回聞き取りに行き、そのことを行政の文脈で（主に行政の願望の文脈で）まとめ上げ､分かりやすいレポートを書くことはしたくはないし、するべきではないと思う。しかしながら、では10回行けばよいのか、20回通えば住民の文脈がつかめるのか。確かなことは何もない。何回行こうが、例えそこに住み着いたとしても、時間の経過とともに対象は日常化し輪郭が日ごとぼやけてくる可能性すらある。

フィールドワーカーとて、最終的にはフィールドワークの結果をまとめ上げる必要性に迫られる。その時にはやはり、知りえたことを、コード化し概念化する抽象化の作業がついてまわる。すなわち、研究者のある視座から見た景色を、最小限の情報の縮減を行いながら、まとめ上げることになる。すると、視座の数だけ景色があるということを受け入れた後に、カテゴリーにはめ込めない現象が残されているということにも気づく。そこにあるのは、視界にはまだ入らない葛藤の結果であり、その残滓である。特に、観光地は観光のまなざしのなかで常にゆり動く両義性のなかにあり、観光地のフィールドワークは全ての現象を捉まえることは不可能で、決定論的には語れない。調査対象の語りから見えてくるのは、語ることによる住民の生き方の実践なのであり、同時に、それをまとめ理論化する研究者もまた、文化の違いに当惑しつつ、世界に「同化」しかつ「異化」して生きようとする実践者であるという事実である。

観光客は「表舞台」から「裏舞台」侵入しようとし、フィールドワーカーは、目に見えるとおりのものではない世界へと視点を侵入させる。両者とも見慣れた世界を「異化」しようとする。しかし、D・マキャーネルがいみじくも指摘したように､「表舞台」から「裏舞台」への侵入は､「生きた博物館」として「演出された真正性」を産出する、意図された観光用の「舞台装置」

なのである（MacCannell,1999/ 2011 安村他訳, pp.120-121）。また、同時にフィールドワーカーもまた、観察対象の人々の行為を、彼 / 彼女らの意味世界（「有意性の構造」）を理解しつつ、結果的には、それを何らかの方法で研究者の意味世界（「有意性の構造」）といった「演出された真正性」（例えば「理念型」）へと翻訳作業を繰り返す。体系性や厳密性の違いがあるが、両者の構造は同型である。

観光地の「表舞台」から「舞台裏」へ、フィールド（現地）の解釈から研究者の解釈へ、「有意性の構造」のチャネリングが様々な偶有性を含むものであり、多様な実践の形があり得ることは、E・ゴフマンが「フレーミング（flaming）」という用語で示した（Goffman, 1974）。プロレスリングのリングの上と下のように、現代人は「有意性の構造」を変化させつつ複数の現実を生きている。特に、双方向の発信、受信が可能なメディアを使い慣れた我々は、世界を「異化」しつつ、構築されつつある「結果」に参入する実践を多少なりとも繰り返している。「エスノメソドロジー」の実践が示したように、観光客は文化創造の実践者であると同時に、フィールドワーカー（あるいは観光研究者全体も）もまた、文化創造の実践者なのである。

ただし、両者が文化創造の「実践者」なのだということは、その「実践」が現地（フィールド）に「関与」することで、現地の行為者の知識へと編入され、そのことから発生する諸葛藤にも加担しているということを意味している。その点に関しても我々は自覚的でなければならない。観光客もフィールドワーカーも現地（フィールド）に関わる限り、現地の世界の意味構成にも責任を負っている。観光客も、フィールドワーカーも、現地の文化創造に関わりつつ「よそ者」という点では同じであり、その「異人」的役割が持つ創造的可能性とその限界（「よそ者」という自覚の必要性）もまた同型なのである。

Covid-19 による観光と（観光の）フィールドワークへの様々な制限は、観光の停滞と観光研究（特にフィールドワーク）の停滞をもたらしたことは否

定できない。しかし、このことはまた、観光研究者に観光と観光研究の解釈論的可能性とその限界を示してくれたのである。

＜注＞

1）マキャーネルの「舞台裏」はあくまでももう一つの「類型（表徴)」を想定しているのでその外側を指す。

2）例えば、バーガーがいうように、年に一度神の怒りを静めるために少女の命を犠牲として火山の噴火口に差し出す儀礼を見て「今年もそういう季節が来たんだな」といった感想を持つフィールドワーカーはいないだろう（Berger & Kellner, 1981/1987 森下訳, p6)）

3）電話やビデオ通話, メールやチャットでは何もできないということではなく、限界があるということであり、緊急事態制限等の制限下のフィールドワークとして優れていないというわけではなく、数々の優れた成果も上げていることは認めるところである。

4）特に、録音、録画、写真、SNS、AR, まち歩きガイド等のメディアを使用することによって、価値の発見の可能性は広がっている。

＜参考文献＞

新井 克弥（2016）『ディズニーランドの社会学 : 脱ディズニー化する TDR』青弓社

Berger, P. L.and Kellner, H.（1981）*Sociology Reinterpreted: An essay on Method and Vocation*, New York: Anchor Press［森下伸也訳（1987）『社会学再考――方法としての解釈』新曜社］.

Castaneda, C.（1968）*The Teachings of Don Juan: A Yaqui Way of Knowledge*, Berkeley: University of California Press.［真崎義博訳（1974）『呪術師と私 - ドン・ファンの教え』二見書房］.

Fisher-Lichte,E.（2010）*Theaterwissenschaft. Eine Einfülung in die Grundlagen des Faches,* Tübingen:Narr Francke Attempto Verlag GmbH Co. KG［山下純照他訳（2013）『演劇学へのいざない―研究の基礎』図書刊行会］.

藤浩志・AAF ネットワーク　（2012）『地域を変えるソフトパワー――アートプロジェクトがつなぐ人の知恵、まちの経験』青幻舎.

Geertz, C.（1973）'Thick description: Toward an interpretive theory of culture',*The Interpretation of Culture*, New York: Basic Books.,pp.3-30.［吉田禎吾他訳（1987）「厚い記述――文化の解釈学的理論をめざし て」『文化の解釈学 I』岩波書店, pp. 3-58］.

Goffman, E.（1959）The Presentation of Self in Everyday Life, New York: Doubleday Dell Publishing［石黒毅訳（1981）『行為と演技』誠信書房］.

――――（1974）*Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience,* Boston:

Harvard University Press.
Helgueruera,P.（2011）*Education for Socially Engaged Art*, Maryland: Jorge Pinto Books, Inc.［アート＆ソサイエティ研究センター　SEA 研究会（秋葉美知子・工藤安代・清水裕子）訳（2015）『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門――アートが社会と深く関わるための 10 のポイント』フィルムアート社］.
Luhmann,N.（2012）*Essays on Self-Reference*, New York: Columbia University Press.［土方透・大澤善信訳（2016）『自己言及性について』築摩書房］.
MacCannell, D.（1999）*The tourist: A new theory of the leisure class*, Berkeley: University of California Press.［安村克己、須藤 廣、高橋雄一郎、堀野正人、遠藤英樹、寺岡信悟訳（2012）『ザ・ツーリスト―高度近代社会の構造分析』学文社］.
――――（2013）*Ethics of Sightseeing*, Berkeley: University of California Press.
松尾芭蕉（1702）［潁原退蔵、尾形仂訳（2003）］『（新版）おくの細道』角川書店.
森彰英（2007）『「ディスカバージャパン」の時代―新しい旅を創造した、史上最大のキャンペーン』交通新聞社.
能登路雅子（1990）『ディズニーランドという聖地』岩波書店.
岡本健（2013）『n 次創作観光　アニメ聖地巡礼 / コンテンツツーリズム / 観光社会学の可能性』北海道冒険芸術出版.
立教大学観光学部、立教大学観光研究所（2021）『RT』No.1.
立命館大学人文科学研究所（2011）『立命館大学人文科学研究所紀要』No,125.
佐藤郁哉（19929『フィールドワーク――書を持って街に出よう』新曜社.
須川亜紀子（2021）『2.5 次元文化論―舞台・キャラクター・ファンダム』青弓社.
Schutz,A. & Luckmann,T.（1975）*Strukturen der Lebenswelt.*［那須壽監訳（2015）『生活世界の構造』築摩書房］.
須藤廣（2017）「観光のパフォーマンスが現代芸術と出あうとき――アートツーリズムを中心に、参加型観光における「参加」の意味を問う」『観光学評論』Vol.5-1, pp.63-78
Urry, J.（1990）. *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Society* , London: Sage Publications.［加太宏邦訳（1995）『観光のまなざし―現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局］.
――――（2002）*The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies Second edition*, London:Sage Publisher.
Urry. J, and Larsen, J.,（2011）, *The Tourist Gaze 3.0*, London: Sage［アーリ, J・ラース, J.（2014）加太宏邦訳『観光のまなざし［増補改訂版］』法政大学出版局］.
山村絲淑（2017）「創造性とコンテンツ・ツーリズムをめぐる若干の随想」
北海道大学観光学高等研究センター『CATS 叢書』, 第 11 号, pp25－32. 法政大学出版局